

あるものが多く、個々の年貢割付なども必ずしも完全な形では残っていない。最も古い年貢関係文書を収める目録番号1と2には寛永6年以降同17年にいたるものが収められているが、目録の表題に「皆済御目録並古書」とあるように、それらに収められているのは年貢の請取である皆済目録が中心となっている。その年に納めるべき年貢額などを記した年貢割付が収められているのは、3以降である。

ここでは目録番号3以降12にいたる巻物に整理された年貢割付を中心に報告すると、その年号は上限が正保2年(1645)、下限が元禄16年(1703)で、そこに整理されている年貢割付の点数は、その59年間における牛堀村の年貢割付が58点、牛堀村の新田の年貢割付が2点、永山村の年貢割付が59点、永山村の新田の年貢割付が15点である。新田の年貢割付は両村とも一定の年代しか作製されていないので、目録番号3以降12の巻物には正保2年以降元禄16年にいたる両村のほぼ毎年の年貢割付が整理されているわけである。年貢割付に記される基本的事柄として村高をみると、牛堀村の村高は正保2年が235.884石(外1.235寺社領)で、延宝元年には235.977石と微増し、明暦2年には新田0.897石が現れるが、新田は延宝7年には7.186石と増加している。永山村では正保2年の村高は606.777石で、同年には新田が25.032石も認められる。その後永山村では本田の高は元禄15年では609.19石となって、新田は元禄元年には52.339石となっている。元禄7年には1.041石が本田に入れられて51.298石となったが、永山村では新田は正保2年の二倍以上となっている。

年貢割付からは年貢の種類や租率のほかその年ごとの付荒の高などを通じて農業生産の状況をうかがうこともできる。今後は破損した割付や皆済目録を再整理しつつ、両村の18世紀にいたる年貢収取の全貌や農業生産の状況を精査していく予定である。

茨城県行方郡牛堀町旧須田家文書の検討

門前 博之

An Examination of the Documents of the
Suda Family in Former Usibori Village,
Namekata-gun, Ibaraki Prefecture

Hiroyuki KADOMAE

旧牛堀・永山両村の名主を勤めた須田本家の所蔵文書については、その目録を昨年完成することができた(「人文科学研究所紀要」35)。本年はその目録の状之部〔年貢〕を中心に検討を進めた。須田本家文書の年貢割付・皆済目録など年貢関係文書は、巻物に整理されているが、状之部〔年貢〕の目録番号3の巻物には表紙の裏に安政6年6月須田源之丞の整理になることが記されている。状之部〔年貢〕の目録番号の最後は20であるが、巻物として年貢割付・皆済目録などが連続して残っているのは1～12までで、13以降は破損した巻物の部分ないし断簡で